

絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2019-新春

No.89

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。



磯の朝 1973年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人

文化財保護・芸術研究助成財団

FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

新年あけましておめでとうございます。

本年四月三〇日に今上陛下が御退位され、五月一日に皇太子殿下が御即位され、第一二六代天皇となります。

今上陛下は上皇とされるわけですが、この称号は近世では江戸時代の第一一九代光格天皇（二七七一―一八四〇）の御退位以来ということですから二〇〇年ぶりのこととなります。

平成の御代から次の時代へと、私たちは今、大きな時代の転換期に身を置くこととなります。そうした歴史に残る年となる本年が安らかな穏多き年であることを心より祈念いたしたいと願っております。

そして、明年は東京オリンピック、パラリンピックの年です。私は、この時の流れ、と言うよりも歴史が作られていく模様をしっかり我が目に焼きつけていこうと思っております。

日中韓文化交流フォーラムは、今や財団の年間行事の中でも大きなウェイトを占めております。昨年の中国貴州省・貴陽市におけるフォーラムに關しては本文をお読みいただきましたく存じ上げます。本年は日本がフォーラムの開催国となります。

第15回目のフォーラムとなる本年は、東京で11月に開催することにいたしました。日・中、日・韓の間が政治的にギクシャクとした関係にあった時でも、このフォーラムは中断することなく続きました。そうした点は、中国も韓国も高く評価し

ております。

私たちも、そうした雰囲気を受け継いで、今後は未来志向のもと、フォーラムの関係の中で三カ国の関係をいかに発展させていくかが課題であると認識しております。

本年のフォーラムのテーマは「音楽」です。秋に東京からどんな友情のメロディーが誕生するのか、注視すると共にご期待いただければ幸いに存じます。

昨年も、我が国は集中豪雨、台風、地震と大きな自然災害に見舞われました。尊い人命が失われ、貴重な財産も失われました。文化財も例外ではありませんでした。毎年、発生するこうした負の連鎖をいかに断ち切るか、ここは人工知能（AI）も含め、多くの叡智を集めてよりよい対応策を創出しなければいけないでしょう。

財団も産声をあげてから三〇年を過ぎました。年頭にあたり、いつも頭に浮かぶのは創設者である平山郁夫先生の言葉です。

「文化による社会貢献、世界平和への貢献」

この心のもと、私たちは本年も歩んでまいります。財団の大きな使命は文化・芸術を守り、これを次世代に伝えていくことです。これはなかなか難しい仕事です。しかし、行動を起こさなければ結果は生じません。千里の道も一歩からの精神で肅々と取り組んでまいれる所存です。

ここで、私自身に關することを記すことをお許しください。昨年の年頭の御挨拶でもふれましたが、

私は目下、クローン文化財の研究、開発に取り組んでおります。本年はこの技術を進化、発展させ、その可能性をさらに追求してまいりたいと考えております。総論から各論へ、さまざまな文化財とクローン技術の関係を明確にし、この技術の成果がどこまで文化財の保存活動に役立ち、貢献できるかについての啓蒙活動もいたしたいと思っております。

私にはもうひとつ、日本画家としての創作活動が控えております。これも大切な仕事です。健康に留意して微力ではありますが、日本の美術界のために少しでもお役に立てればと願っております。

もちろん、理事長として財団の運営に關して重責をになっていることは十分承知いたしております。皆さまの暖かい御理解と御支援のもと、頑張っております。よろしくお願い申し上げます。

ところで、ここ数年の傾向ですが、財団は財政面で苦戦を強いられております。私どもは、これを打破すべく経費節約はもちろんのこと、支援者を増やす不断の努力をしております。私どもの仕事は地味な努力を必要とされています。しかし、その努力の積み重ねが、日本が目標としている世界に冠たる文化芸術立国の実現に少しでもお役に立てれば、と願う次第です。混沌とした世界情勢の中で、この努力は前記の世界平和への貢献につながるものと信じます。

皆さま、本年も私どもの意をお汲み通りのうえ、よろしく御指導、御鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

新しい御代の始まりの年に向けて



理事長
宮廻 正明
(みやま しょうめい)

カンタベリー大聖堂、聖オーガスティン大修道院及び聖マーティン教会

英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）



ユネスコ世界遺産（文化遺産）シリーズ

©UNESCO

イギリス国教会の総本山であるカンタベリー大聖堂は六世紀末に建てられたが、十二世紀末に焼失したのちに再建され、イギリス最初のゴシック様式の大聖堂となった。高さ七十二メートルの棟は十五世紀末に完成しており、十二・十三世紀のステンドグラスや壁画・柱頭彫刻がある。

一一七〇年、カンタベリー大司教のトマス・ベケットが、政教分離をめぐる当時の国王ヘンリー二世と対立し、ここで暗殺された。

ベケットが後に列聖されたため、多くの巡礼者がここを訪れるようになった。

（一九八八年に文化遺産として登録）

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟



ICOM 国際博物館会議

京都大会開催に向けて
博物館は、その国の文化の歴史を映す鏡。
世界の博物館が直面する諸問題。
博物館のあるべき姿、等々……。
博物館をめぐる課題が京都で討議される。



ICOM京都大会
運営委員長
栗原 祐司
(こしはら ゆうすけ)

ICOMとは

今年九月、ICOM (The International Council of Museums: 国際博物館会議) 京都大会が開催される。ICOMは、一九四六年に創設された世界の博物館の進歩発展を目的とする唯一最大の世界的博物館の専門組織であり、歴史や美術、考古学、民俗、科学、技術、自然史などの博物館関係者の国際的な集まりである。また、ユネスコと公式な協力関係を結んでいる非政府団体(NGO)であり、加盟国は一四一の国・地域におよそ四万人の会員を持ち、本部はパリに置かれている。ICOMの会員は加盟各国毎で構成する国別の国内委員会(National Committee)と、専門分野の国際委員会(International Committee)に所属することができ、現在、三十の国際委員会が独自の活動を展開している。また、六つの地域連盟(Regional Alliance)と、二十三の関連団体(Affiliated Organisation)が置かれている。これらの委員会は、ほぼ毎年世界各地で年次会合を開催しているが、三年に一回一堂に会して開催されるのがICOM大会(ICOM General Conference)である。これまで二〇〇四年に韓国・ソウル、二〇〇七年にオーストラリア・ウイーン、二〇一〇年に中国・上海、二〇一三年にブラジル・リオデジャネイロ、

そして二〇一六年にイタリア・ミラノで開催している。大会は約一週間の期間で行われ、開会式や基調講演、全体会議、各国際委員会等のセッションが開かれるメインの会議場とともに、周辺地域の博物館を中心に開催されるオフサイト・ミーティングやエクスカーション、また、多くの博物館の協力の下に大会に合わせて実施されるさまざまな特別展やイベント、入館者へのサービスなどが展開される。

ICOM大会は、それぞれの大会ごとにテーマを定め、全体の基調講演や各国際委員会もそのテーマに沿った内容で実施される。開催国にとって大会は、単なる専門家による世界会議という位置付けではなく、大会の終了後を視野に長期的な博物館の振興策と連動させることで、継続的な博物館の発展を促すきっかけとして有効に機能するケースも多い。

京都大会について

ICOM大会の開催期間は、二〇一九年九月一日(日)～九月七日(土)であり、参加者は国内外から約三千人を見込んでいます。国立京都国際会館をメイン会場とし、京都市内の博



ICOM-CAMOC(都市博物館国際委員会)～ドイツのフランクフルトにおける会合の様相(2018年)



ICOM-ICAMT(博物館建築国際委員会)～ポルトガルリスボンにおける会合の様相(2018年)

し、その設置者や形態、規模も様々だが、それぞれの博物館が有機的に連携し、文化の結節点として各地域、さらには国内外とネットワークを構築することによってその存在価値を示し、社会的役割を果たしていくことが求められている。このため、ICOM京都大会においては、世界遺産をはじめ数多くの有形無形の文化遺産が存在する歴史都市であることを踏まえ、博物館が伝統的な文化を活かしながら豊かな未来を創造する文化的な拠点として、新たな機能を創出することを考える場とすることが、テーマの趣旨である。

パリで産声をあげたICOMは、ヨーロッパでの活動を主体に展開されてきたが、今や日本、中国、韓国をはじめとするアジア諸国でも数多くの博物館ができ、専門家が育ってきており、博物館に関する学問も発展を遂げてきて

ICOM京都大会の日程等について

いる。一方で、アジアの国々では、未だ多くの紛争や自然災害が多発しており、文化財の不法輸出入や移民、ジェンダーの問題等、欧米と同様の課題も抱えている。ICOM京都大会では、これらの課題にアジアの博物館は何かできるのか、改めてアジアにおけるICOM大会開催の意義を考え直す場にもしたい。二十五回目の節目を迎える京都大会では、過去の歴史に学びながら、新たな未来を切り開いていくことが求められる。

- 9月1日(日) 諮問会議、国内委員長・国際委員長ミーティング、各国際委員会役員会議等
- 9月2日(月) 開会式、基調講演、博物館見本市、各国際委員会等の会合、オープニング・パーティ
- 9月3日(火) 基調講演、全体会合、博物館見本市、各国際委員会等の会合、ソーシャル・イベント



ICOM-UMAC(大学博物館国際委員会)～エジプトのアレキサンドリアにおける会合の様相(2014年)



ICOM-INTERCOM(国際委員会)～インドのコルカタにおける会合の様相(2018年)



ICOM～イタリアのミラノ大会における基調講演の様相(2016年)



ICOM～ミラノ大会のトリノ大学におけるUMACオフサイトミーティングの様相(2016年)

ICOM大会の開催は、それ自体が目的ではなく、今後の我が国の博物館の振興や博物館学の発展に向けた第一歩に過ぎない。したがって、一人でも多くの博物館関係者の参加を得ることはもちろん、これを契機に日本国民一人一人が博物館の社会的役割とその重要性に気付くことのできるような内容を心がけ、博物館法をはじめとする法制度の改善や関連予算の拡充につなげていく必要がある。そして博物館を通じてアジア諸国をはじめ世界に文化発信することにより、我が国の国際的地位の向上と、より一層の国際交流の促進が図られるよう努めなければならない。我が国の博物館史上、ICOM京都大会が一つの大きなターニング・ポイント(歴史的転換点)となつたと、後世に語り継がれるようなものになればならないと考えている。

詳細な情報は、ICOM京都大会のホームページ(<http://icom-kyoto-2019.org/jp>)より確認いただければ幸いである。

筆者略歴

一九六六年、東京に生まれる。一九八九年文部省入省後、文化庁美術学芸課長、東京国立博物館総務部長等を経て、二〇一六年より京都国立博物館副館長、日本博物館協合理事、ICOM日本委員会理事、日本展示学会副会長等も務めている。

東京藝術大学文化財保存修復油画研究室をふりかえって

文化財は人類にとって共通の宝もの。
しかし、避けて通れないのが経年による劣化。
そうした文化財にとって救いの主とも言える
修復の第一人者が語る自伝的修復論。

文化財修復は面白い

ここかしこを見わたせば、損得ばかりを計算してうごめく人間社会が見えてきますし、ニュースを見れば、大同土の争いことも絶えることなく連鎖しています。一体いつになったら健全な社会がとずれるのか、全くもって期待できない現在の社会状況です。

しかし、文化遺産の中にひとたび入ると、過去に残した芸術作品が、そんな社会とは無関係に生き生きとして光を放ち輝く様子に出会います。人間社会の醜い争いことから見事に離れて自ら充足している作品の姿に深く心を動かされたことはたびたびです。私は修復屋ですから、古びて劣化し損傷した作品を取り扱います。いくら経験があるからと言っても中には製作当初の状態がまるで見当もつかぬほど傷んで修復作業で手をつけるのも恐いくらいの作品も多々ありました。時には「やってみなければ分からない」、さわってみなければ分からない」と言う作品に出くわすこともあり、だからと言って強行突破はできません。無理すると逆に作品を傷めてしまうからです。冷や汗しながら進める神経戦はストレスそのものです。一方で、それを乗り越え解決が見えたとき、そして、作品が本来持つて

いる魅力が顔を出し回復できると確信したとき、その時の喜びは修復を担当した者にとって「修復者冥利につきる」かけがえのない一瞬だと言えます。そんな体験を重ねて、文化財修復は実に面白い職業だと思つて現在に至っております。言い忘れましたが、私の専門は大学院の文化財保存修復領域で主に油画修復にたずさわっています。

始まりは絵描き希望から

私は今年度で東京藝術大学を退任いたします。在職十七年間となります。修復の世界に入る前、絵描きになろうと思ひ立ち北海道から上京してきました。浪人時代、受験勉強のためにメチャクチャとも言えるような使い方方で受験用の油絵を急ごしらえて描いていました。しかし、使う画材の組成や油絵本来の適切な使用方法を知らないことに気づき、油絵本来の使い方があはずだと、当時その研究に取り組んでいた唯一の学校である国立市（現在、西池袋）にあった創形美術学校に将来を賭けてみました。はばかり言え、当時の創形美術学校は私の好奇心を十分満たしてくるだけの内容を持ち、



筆者による黄金背景テンペラ画の模写（フラ・アンジェリコ作「リナイウォーリー祭壇画」）

修復の世界に入り込む

魅力的な学校でした。新設されて間もない学校でしたから、先生たちの試行錯誤とそれに学生も加わって両者無我夢中の熱い時代だったと言えるでしょう。まさにその時の活きた体験が確実に現在の私につながっています。創形美術学校で出会った黄金背景テンペラ画は、その時とりつかれてライフワークになりました。

修復の世界に足を踏み入れた途端、その手仕事にすっかり魅了され深みにはまることになってしまいました（創形美術学校修復研究所）。当時、日本経済はバブル真つただ中で、全国の地方都市に美術館博物館が怒濤のように建設されるという時代でした。それまで地方に埋もれていた貴重な美術作品が次々に見出され、傷んで修復が必要な作品は次々に修

大学制度の中に入る

二〇〇二年、二十年勤めた修復現場から立ち込め、幻想的な雰囲気にして、一夜の楽しい親睦会となりました。最後に、最初のころから参加してくださった皆勤賞の宮田亮平文化庁長官、文化財保護・芸術研究助成財団の職員のみなさま、同時に、これまで煙に燻されながら文句も言わずサンマを焼いてくれた学生たち、この場をお借りして、深く感謝申し上げます。まとまりの悪い文章になってしまいましたこと、お許しください。

一九五一年北海道生まれ。七十七年創形美術学校研究科造形課程修了。八十年創形美術学校修復研究所（後に有限会社修復研究所21となる）に入所。現在、東京藝術大学大学院美術研究科教授（文化財保存学保存修復油画専攻）。主に油彩画修復を指導することともに、黄金背景テンペラ画と言われる古典絵画技法の指導を行っている。主な修復作品、ミレー「種をまく人」（山梨県立美術館蔵）、藤田嗣治「舞踏会の前」（大原美術館蔵）。共編に「藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からの報告」（東京藝術大学出版会）がある。これまでに、文化財保存修復学会から業績賞、学会賞を受賞。



東京藝術大学美術研究科教授（文化財保存学）
木島 隆康
（きじま・たかやす）



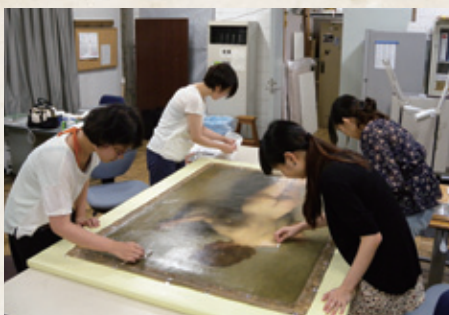
ミレー作「種をまく人」を修復する筆者



藤田嗣治作「舞踏会の前」を修復する筆者

いか、それを救うのはやはりその人が身につけた豊かな教養と言えるのではないのでしょうか。教養を先導するのは知的好奇心です。私はそのようなことを基軸に学生と向き合うようにしてきました。

藤田嗣治の秘密技法の解明



研究室で行っている共同修復作業



研究室で行った藤田嗣治作「舞踏会の前」の修復

高校時代から藤田嗣治（一八八六―一九六八）の絵に注目してきました。藤田の「素晴らしい乳白色の地塗り」に秘密はあるのか否か、もともとそんなものではなく、ただの神話だ、と

親睦の一時「サンマの会」

した。詳しく知りたい方は「藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からの報告」（共著 東京藝術大学出版会）をご参照下さい。

修復という職業はどうしても地味で暗いというイメージを避けることができません。華やかな美術館、博物館の舞台裏を支える裏方仕事と見られがちです。実際そうなのですが、若い頃の自分自身を振り返ってみても、表に出ることがあまり得意ではなく、できれば部屋の片隅で好きなことに手を動かしてさえいればそれだけで大満足する性格でした。しかし、修復の世界に入って、気づかされたことは、人間の関係性を避けて生きてはいけないと痛感させられたこと。自分とは社会の関係性の中でしか確かな自分であり続けることはできないということ。この世界に携わって教えられたことです。文化財修復をどのように社会性を持たせて広げていったら良いのか、そこで思いついたのが「サンマの会」です。創形美術学校修復研究所時代の忘年会「鮭祭」にヒントを得ました。文化財保存に関わる関係者や藝大関係者、さらに専門領域を越えて幅広く声をかけてみました。徐々に賛同者が増えて、開催は十五回を数えました。昨年十月に行った会では、サンマ四〇〇匹を焼き、参加者は三〇〇名を越えました。屋外で焼くサンマの煙はモウモウと会場

筆者略歴

一九五一年北海道生まれ。七十七年創形美術学校研究科造形課程修了。八十年創形美術学校修復研究所（後に有限会社修復研究所21となる）に入所。現在、東京藝術大学大学院美術研究科教授（文化財保存学保存修復油画専攻）。主に油彩画修復を指導することともに、黄金背景テンペラ画と言われる古典絵画技法の指導を行っている。主な修復作品、ミレー「種をまく人」（山梨県立美術館蔵）、藤田嗣治「舞踏会の前」（大原美術館蔵）。共編に「藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からの報告」（東京藝術大学出版会）がある。これまでに、文化財保存修復学会から業績賞、学会賞を受賞。



第15回「サンマの会」の集合写真。楽しい親睦会となる

重要文化財・旧東京音楽学校奏楽堂

旧くて新しい奏楽堂がふたたび奏でる

日本の音楽教育の黎明期を支えた
旧東京音楽学校奏楽堂の
保存活用工事が昨年の秋に終了。
その模様を報告……。



リニューアル・オープンした旧東京音楽学校奏楽堂

◎旧奏楽堂について

このたび、旧東京音楽学校奏楽堂（以下、旧奏楽堂）が、保存活用工事を終えて平成三十年十一月にリニューアルオープンいたしました。

旧奏楽堂は、東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校の施設として明治二十三年（一九一〇）に建築され、日本における音楽教育の中心的な役割を担ってきました。二階の音楽ホー



明治23年当時の東京音楽学校

正面右側の地にある
瀧廉太郎像



昭和62年、現在の上野
公園に移築後の外観



◎旧奏楽堂の特徴

になりました。翌六十三年には、日本最古の洋式音楽ホールとして国の重要文化財に指定されています。以来、旧奏楽堂は、「生きた文化財」として、建物の公開のほか、演奏会や音楽資料の展示を行ってきました。

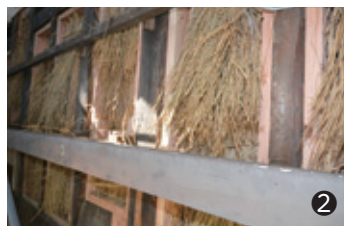
《ホール》旧奏楽堂の設計者は、明治時代を代表する建築家・山口半六（二八五八―一九〇〇）と久留正道（二八五五―一九一四）であり、音響設計は上原六四郎（一八四八―一九一三）が手掛けたとされています。この建物には、デザインや技術的な面において以下の工夫がみられます。

①ホールの中央天井をヴォールト状（かまぼこ型）に高くして、視覚上、排



奏楽堂ホール

藁を使って遮音効果を上げる



《パイプオルガン》旧奏楽堂のパイプオルガンは、大正九年（一九一九）に御三家のひとつ紀州徳川家第十六

◎保存活用工事について

経年により外観や設備が老朽化し、また、十分な耐震性能を満たしていないことが判明したことから、平成二十五年（二〇一三）四月より休館し、平成二十七年十二月より約三年間をかけて保存活用工事を実施しました。主な工事内容をご紹介します。



①



②



③

外壁の補強作業の様子。①、②、③

置しました。また、大地震時における天井仕上げ材の損傷及び落下に対して、より安全性を高めるために、天井材の地下及び小屋組内にも補強を施しています。

①外壁の解体は手作業で行い、当て木をしながら一枚一枚丁寧に取り外しました。

②取り外した外壁材は同じ位置に復旧する必要があるため、あらかじめ約一万枚の木材の一つ一つに木札で番号を付け、建物内に整理して保管しました。

③壁内部に補強用合板を張ったところ。この後、外壁材も元の位置に復旧しています。また、外壁の塗装は昭和六十二年の移築・復原時の調査結果に基づき、塗装を施しました。



①

保存活用工事を終えたホール内部と防音窓



②

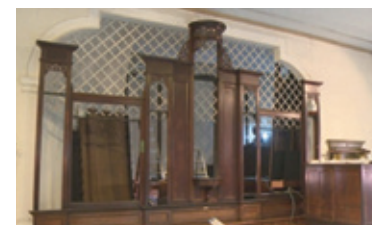
《整備活用工事》本工事後も、文化財的価値を維持・継承していくことを前提に、利便性を向上させるような工事も行っています。

①ホール客席のサイズが大きくなり、快適にご利用いただけます。

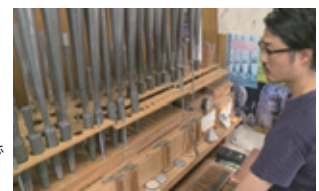
②外部からの騒音を遮音するため、ホール客席側に防音窓を設置しました。



修理後のパイプオルガン



パイプを運び出した後の様子



オルガン工房での作業の様子

《保存修理工事》主に経年による劣化・破損に対する修理として、外壁塗装や屋根漆喰の塗り直し、外部木部の腐朽箇所や硬化した窓ガラスのパテ補修などを行っています。

①正面玄関ポーチの雨腐れによる破損状況。

②補修用の新しい材料を加工しているところ。

③破損していた部分を新しい材料で継いだところ。



①



②



③

正面玄関ポーチの工事。①、②、③

文化財の工事では、可能な限り既存の材料を活用しながら工事を進めます。この後、元の形状通りに復旧していきます。

◎結びに

約五年半ぶりにリニューアルオープンした旧奏楽堂では、多くの皆様に文化・芸術に親しむ機会を提供してまいります。

今後も「生きた文化財」として皆様に愛され続ける文化施設となりますよう、一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



台東区文化産業観光部
副参事
吉田 美弥子
（よしだ・みやこ）

チューバと 二人三脚で歩んだ 音楽人生

オーケストラの上段右に鎮座する
巨大な金管楽器——チューバ。
その演奏の第一人者が語る
チューバが決めた我が人生。



東京藝術大学名誉教授
稲川 榮一
(いながわ・えいち)

チューバに魅せられた作曲家たち

チューバは、ラテン語で「管」という意味で、ローマ時代には既に楽器の名称としては使われていたようですが、現在の低音金管楽器「チューバ」は、十九世紀中頃に考案されたもので、オーケストラに登場してから歴史はまだ浅いのです。

チューバに大変興味を示したドイツの作曲家R・ワーグナー（一八二三〜一八八三）は、一八四五年ドレスデン歌劇場で初演した「タンホイザー」の中にこの楽器を用いました。

このオペラを聴きに来ていたフランスの作曲家ベルリオーズ（一八〇三〜一八九九）は、チューバの音色に大変感動して、後に自分の作品の中にも多く取り入れるようになっていきます。

ワーグナーは、その後の楽劇「ジークフリート」では重要なテーマをチューバに要求する等、頻繁にこの楽器を用いています。チューバ奏者にとってはワーグナーの作品を演奏する際は、特別の技術と、表現力が要求



高校一年生。チューバと共に（1961年）

されるので、演奏後は達成感、高揚感というかアドレナリンが出てくるのを感じます。

他のブルックナー（一八二四〜一九〇一）、マーラー（一八六〇〜一九一九）、R・シュトラウス（一八六四〜一九四九）等の後期ロマン派作曲家、また、ストラヴィンスキー（一八八二〜一九七二）等の近代作曲家の作品でもチューバは重要な役割を担っています。でも、残念ながら、チューバは他の金管楽器に比べると世間の認知度は低いのが現実です。

私とチューバの出会い

そもそも私がチューバを始めたのは、二歳年上の兄が中学校の吹奏楽部でホルンを吹いていて、何の知識もないまま入学した私に、チューバのパートが空いているからと半ば強引に導入させられて、与えられた楽器はチェコ製で、古くてカビ臭く音も全く出ない代物だったので、水洗いし、真鍮磨きでピカピカに、ピストンには油を注し、なんとか使える状態にしたら、それらしい音が出て感動したのが始まりでした。

吹き方は兄に習い、毎日、ただただ、マーチのリズムを練習、その後で合奏するという地味な部活動でした。吹奏楽の盛んな高校に入ってからチューバ一筋、演奏する曲のレベルは高くなり、学校行事で演奏する機会も増え、益々吹く事が面白く



ベルリン音楽大学のチューバ部屋でヒロニムス・エンゲルス先生と（1972年）



ケルン市立ギルツェニツヒ管弦楽団に入団まもない頃。トンボン・セクションと歌劇場のオーケストラピットで

つかドイツでこの音楽を学びたいという強い気持ちが生まれたのでした。

藝大卒業後は読売日本交響楽団に三年間在籍し、一九七二年九月から一年間の留学が認められて、念願のベルリン音楽大学でエンゲルス教授に師事する事が実現しました。

この留学が自分にとって最後の充電期間になると考えていたので、日曜日以外は学校のチューバ部屋の「主」状態で練習に明け暮れる日々でした。

ある日、下宿の大家さんがエンゲルス教授から電話だと飛んで来ました。

「ベルリンフィルがマーチの録音をするので教会に楽器を持って行きなさい」

ドイツ語も良く話せないのに、カラヤン（一九〇八〜八九）指揮の録音に参加できたのは最高の思い出です。

留学して四カ月が過ぎた頃、ケルン市立ギルツェニツヒ管弦楽団のチューバ奏者募集の記事を見つけ、教授に受けたいと相談したところ「このオーケストラには歴史があり、ドイツの中でもトップクラスだから、オペラの事をまだ少ししか教えない君には無理！」応募に必要な推薦状も書けないと返答。私も粘って「次の夏には帰国が決まっているので、ドイツ・オケの入団試験を経験したい、他のチューバ奏者の演奏も聴きたい」と訴えました。

結局、先生の弟子がオーケストラに居たので、推薦状無しで飛び入り受験が認められました。日本と同様にドイツでもチューバの席は減多に空かないため、多数の応募者があり、書類選考で三〇名に絞り、試験は



ユネスコ世界遺産にも登録されたケルン大聖堂のドーム完成百年記念の祭典で当時の衣装で。左は現在ベルリンフィルのトンボン奏者であるC・ゲッセルリング氏（1980年）



世界一大きなチューバを吹く

ソロ曲から開始され、オーケストラやオペラの作品のチューバパートを吹かされるうちに、段々落伍者が増え、最終に残ったのがシカゴから駆け付けたアメリカ人と私だけ、さらにオペラの重要な箇所を交互に試験されました。団員から「もつと弱く柔らかく」「このフレーズは一息で」とか要求され、入団試験の厳しさを体感しました。終了後、音楽監督のG・ヴァント氏が私に「おめでとう」と握手、団員達がお祝いの握手をしてくれて、半信半疑状態でした。

傑作だったのが、教授に電話で報告したら、「なにっ！本当か？」と、いつもは冷静な先生が非常に興奮されていたことでした。

ヨーロッパでの活動

入団したオーケストラは、毎月、シンフォニーの演奏会もありましたが、シーズン中はケルン歌劇場での公演がほぼ毎日あり、演目も変わるのオペラ経験のない私は必死で練習するだけでした。もちろん、練習なしの本番も多くありました。金管セクションの仲間には本当に親切に教えてくれ、助けてくれ、その素晴らしい響きの中に自分加わっているという喜びは、苦勞を忘れさせてくれるものでした。

ケルンでの仕事にも慣れた頃には、金管五重奏団を結成、ソロ活動、R・シューマン（一八一〇〜一八五六）音大講師等、仕事の幅も広がっていききました。オーケストラにはチューバ奏者が二人いたため、他のオーケストラからのエキストラ依頼も多かったのです。

十六年間に在籍して永住ビザも得て、恵まれた環境で

したが、悩み悩んだ結果、日本への帰国を決心しました。仲間には引き留めてくれて「お前の席は二年間空けて置くらいつても戻って来い」と有難い言葉も頂きました。

そして、今……

一九八九年九月に帰国、洗足学園、国立音大、藝大で非常勤講師、古巣の読響の企画を任される等、仕事も順調でケルンの仲間には安心してもらえました。

一九九五年に藝大常勤教官になり、チューバ専攻生、室内楽、途中から吹奏楽も担当するようになり、私の体験、経験を伝える場を多く持てたのは幸せでした。

二〇一三年の私の退任コンサートの際には総勢六十五人の生徒たちが、楽器を持って藝大の演奏堂の舞台で低音楽器を響かせてくれ涙、感謝、涙。

聴きに来てくれたお客様たちから初めてチューバを聞きましという感想が多くありました！



ドイツ、マルクノイキルヒェン国際音楽コンクール審査員たちと世界一大きなチューバの前で（左より2人日本人）

筆者略歴

一九四五年広島県生まれ。東京藝術大学音楽学部卒。読売日本交響楽団を経て渡独。一九七二年ベルリン音楽大学に留学。在学中、ケルン市立ギルツェニツヒ管弦楽団に入団。以後、十六年間にわたりヨーロッパで演奏活動が続ける。一九八九年に帰国。東京藝術大学教授を経て、現在、日本大学芸術学部音楽学科及び尚美学園の非常勤講師。藝大名誉教授として後進の育成に力をそそいでいる。

日中韓 文化交流フォーラム報告

中華人民共和国の西南部に位置する貴州省。
亜熱帯高原のこの地は「天に三日の晴れ無し」、
「地に三里の平地無し」と言われている。
茅台酒と茶で知られる省都・貴陽市で開催された
フォーラムの様子は……。

財団専務理事 **小宮 浩** (こみや・ひろし)

遙かなる貴陽市

第14回日中韓文化交流フォーラムは、昨年九月十四日から十八日までの日程で、中国貴州省の省都・貴陽市で開かれました。

日本から貴陽市までは遠く、朝、羽田空港から九時の便で北京に入り、貴陽龍洞堡国際空港に到着したのは、夕方の六時をまわっておりまし。

空港でちよと驚いたのは、熊本県ゆゆるキヤラで知られる「くまモン」に迎ええられたことです。そのシヨップはクロース状態だったので、何のお店だったのか、わかりませんでした。

貴陽市とソウルとの間には直行便がありすが、この日、韓国代表団の到着は夜、十時を過ぎていました。

例年ですと、代表団の到着日に歓迎会が開かれるのですが、こうした事情で歓迎会は翌日。森につつまれた宿舎の花溪迎賓館は、キンモクセイの香りと虫の鳴き声につつまれて夜は更けてゆきました。



貴陽市の風景

貴州ビッグデータ総合試験区展示センターの前にて



貴州省に住む少数民族の紹介（貴州省博物館にて）。民族衣装はカラフルであり、デザインもユニーク



3カ国代表団勢ぞろい

貴州省は様々な民族の顔を持つ

九月十五日晴。歓迎会は夕刻ということ、九時半に迎賓館を出発し、貴陽市の中心へ。貴州省は二十三ある中国の省の中でも、貧しい省のひとつに数えられています。それゆえ貧困からの脱出が現在、この省にとつて大きな課題となつていいます。案内された貴州ビッグデータ総合試験区展示センターや貴陽城郷計画展覧館は、そうした努力の成果の一つでした。AI、ITの技術をふんだんに活用した展開に一同、感心した次第です。

見学終了後、貴州料理の名店で昼食。唐辛子と酸味のきいた味がこの特徴でしょう。結構、刺激的でもあり、美味でした。

午後は貴州省博物館へ。中国は他民族国家です。中でも貴州省は、その典型で、多数派の漢民族



フォーラム午前の部を無事終えて。左より宮廻正明、傅伝耀、林怡、鄭求宗の各氏



今回のフォーラムのエンブレムを背に「わたしは未来」を熱唱する児童合唱団の皆さん



韓国・朴東春氏の講演
中国・陳娟英氏の講演
岡倉天心を語る佐藤道信教授
挨拶する宮廻委員長

族の他にミャオ族をはじめ、ブイ族、トン族、トウチャ族などの少数民族が暮らしています。その比率は四〇パーセントほどでしょうか。当然、政治、経済、文化などの面においても、そうした影が色濃く反映していることは当然と言えます。

フォーラム前夜

宿舎の花溪迎賓館に戻り、休憩したのち、午後五時半より、貴州省人民代表大会常務委員会元副主任の傅伝耀氏と会見。この席で日中韓の代表団が一堂に会しました。

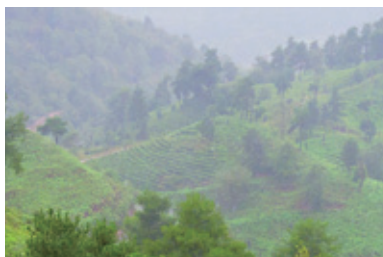
今回のフォーラムのテーマは、「茶文化の潜在力を掘り出し、運命共同体の構築に寄与する」というもの。

そのため、日本代表団は、当財団の宮廻正明理事長を委員長に元ユネスコ大使、カナダ大使の門司健次郎氏、(株)伊藤園専務の社三雄氏、そして東京藝術大学の佐藤道信教授に参加していただき、総勢七名。韓国代表団は鄭求宗委員長以下八名。そしてホスト国の中国は中国人民対外友好協会の林怡副会長を委員長に七名。貴州省からは前記の傅氏以下六名の先生方が参加されました。

歓迎宴は和気藹々と進んだのは、よいのですが、中央政府からのお達しとかで、アルコール類は一切出されませんでした。



休憩。まずは茶を一服。前列左より権内鉉（韓国）、宮廻委員長、筆者、社三雄、仙波志郎参与、後列左より門司健次郎、李康民（韓国）、丸山純一事務局長の各氏



雨に煙る花溪久安茶園

何が話し合われたのか

貴州省自慢の茅台酒も出ないわけですから、正直なところ驚きとともに不満でもありました。

ジューズで乾杯では盛り上がりません。そこで許しを得て、「酒サムライ」を名乗る日本酒の研究者でもある門司氏が日本から持参した日本酒を出したところ、フォーラムの前夜祭は大いに意気が上がった次第でした。

九月十六日。午前九時、貴陽孔学堂へ。こは総合文化施設地域の中にあります。

午前九時半よりフォーラムの開幕。冒頭、地元の児童合唱団が、今やフォーラムの「会歌」となった「わたしは未来」を三カ国の言葉で美しく歌いあげました。

日中韓三カ国の委員長長の挨拶では、いずれも嗜好品として、農作物としての「茶」の優越性を語ったあと、飲茶の風習が昇華して「茶道」という文化が生まれたことを評価、そして茶は、文化、友好の潤滑油と結論づけたことが印象的でした。

専門家の講演は、まず、中国廈門博物館副館長の陳娟英氏が日、中、韓における茶文化の特徴を語り、さらに日本でも関心の高い曜変天目茶碗について見解を述べるなど、茶をめぐる多岐にわたる研究成果を披露されました。

つづいて佐藤道信先生は「岡倉天心の『茶の本』に見る日本人の美意識について」という演題で日本独特の文化となった茶道は、いかにして生まれたか、と熱く語られました。

韓国の朴東春・東アジア茶文化研究所所長は、「宗と高麗との茶文化の交流」をテーマに中国からもたらされた茶、茶文化が韓国国内でいかに定着し、発展していったかを語られました。

最後に貴州省茶文化研究会の周開迅副会長が特別講演ということで、貴州省にお



カラフルな民族衣装を纏ってくりひろげられる茶芸ショー



カルスト地形が生んだ特異な姿の山も貴州省の特徴

豊臣秀吉の朝鮮出兵をめぐる陶工の話など幅広い分野での話が討論されました。

門司委員は外交官としての立場から外交の現場における茶の効用を、また社



委員討論会の模様

松下功先生の訃報

話を戻します。「わたしは未来」を歌った男女五〇人ほどの児童合唱団のコーラスは見事なものでした。

フォーラムを終えて休憩を兼ねた夕食の席に訃報が入りました。「わたしは未来」の作曲者である松下功先生がオーケストラのリハサールの場で倒れ、帰らぬ人になられたというのです。

驚きと悲しみが交差しして何とも言えぬ気持ちに陥りましたが、同衷心より先生のご冥福を異国の地でお祈りいたしました。

この夜、八時から貴陽孔学堂で王陽明の生涯を描いた新劇「此心光明」——わが心、光に向かい——を観劇。演出の斬新さが印象的なお芝居だと思いました。

台風之余波の中で

九月十七日。日本から西へ向かった台風22号が、この日、中



貴茶会社との交流（茫父書院）

貴茶会社との交流ということで、茫父書院へ。この建物は中国的感覚で言えば小さな集会場でしょう。

会社での説明を映像で見た後は質疑応答。こは専門家である社委員におまかせでした。

この日、韓国の代表団の方たちは、夜の十一時五〇分の便で帰国の途につかれました。かく言う私たち日本代表団も翌朝五時半に迎賓館を出発。帰国の途についた次第です。

※ ※ ※

今回も「日中韓文化交流フォーラム」は尊敬の念を持って、互いの友情を確認する場となり、志なく終了いたしました。

貴陽市の皆さま、このたびは大変お世話になりました。また、中韓の関係各位の御努力に敬意を表すと共に感謝申し上げます。ありがとうございました。

事務局報告

平成三十年度助成事業の採択状況について
平成三十年度助成事業の申請、採択状況について次のとおり報告します。

■文化財保存修復助成事業

二十七都府県の教育委員会から推薦があり、審査の上、次のとおり助成を決定しました。

	申請数	採択数	決定金額
美術工芸	十六	五	百五十万円
建造物	三十八	十九	七百二十万円
有形民俗	六	三	百万円
その他	一	〇	一
計	六十一	二十七	九百七十万円



修復された「大英寺本堂」(長野県長野市)

■芸術研究等助成事業

研究者からの申請に基づき、審査の上、次のとおり助成を決定しました。



東京藝術大学 味見純「和楽の美」公演

申請数	採択数	決定金額
十四	十	三百八十万円

■国際協力助成事業

研究者からの申請に基づき、審査の上、次のとおり助成を決定しました。

申請数	採択数	決定金額
十一	八	三百九十万円

■重点助成事業

(1) 東日本大震災被災文化財復旧支援事業
三県の教育委員会から推薦があり、審査の上、次のとおり助成を決定しました。

	申請数	採択数	決定金額
美術工芸	一	一	百九十万円
建造物	十	九	千六百万円
計	十一	十	千七百九十万円

(2) 尼門跡寺院文化財保存修復助成事業

本事業は、平成十二年度から企業等のご支援を受けて毎年一件の助成を実施しているものです。平成二十二年度からは東芝プラントシステム株式会社様のご支援・ご協力を得て実施しております。(平成三十年度未定)



平成29年度助成
真如寺
「仙寿院宮(理昌尼)座像」(修理中)

(3) 松尾大社本殿等保存修復支援事業

松尾大社は、千三百年を超える歴史を有する日本の古社です。本事業は「松尾大社平成の御遷宮奉賛会」の呼びかけによるご支援を受け、本殿等歴史的建造物の保存修復事業を平成二十八年度から実施し、平成三〇年度は最終年度です。

平成三〇年度は、「葵殿御屋根銅板葺替」他十三件、七千万円の助成を決定しました。

ご寄付を頂きました皆様

●平成三十年九月二十一日から十二月二十日まで

敬称略 順不同

☆寄付金

○文化財保存修復・芸術研究等助成事業に対する寄付

ヤフーネット募金(201名様)
文化財保存修復支援カレンダー募金
(公財)日本交通文化協会

○熊本地震被災文化財救援・修復支援事業に対する寄付

○東日本大震災被災文化財救援・復旧支援事業に対する寄付

○松尾大社本殿等修復支援事業に対する寄付
平成の御遷宮奉賛会(5件)

お願い

◎熊本地震被災文化財の救援と復旧のための募金をお願い

一昨年四月以降、熊本県を中心に発生した熊本地震により被災した文化財の救援・復旧支援事業につきましては、当広報誌においてご報告し、また、被害状況等につ

てもお知らせしているところであります。

当財団は、文化庁及び熊本県庁はじめ関係諸機関と協力し、被災文化財の救援・復旧活動を進めております。しかしながら、まだまだ財源が不足しています。引き続き皆様の温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

募金のお振込み手続きは左記の銀行振込又は郵便振替によりお願い申し上げます。

*

銀行振込(①銀行名②口座番号③名義)

① 三井住友銀行 上野支店

② 普通 8399622

③(公財)文化財保護・芸術研究助成財団
※銀行振込の場合、振込者の確認が難しいため、領収書、お礼状の発行等の必要上、財団事務局に事前にご連絡をいただけると幸いです。

(電話:〇三・五六八五・二三一一)

郵便振替(①振替番号②加入者名)

① 00160・5・12319

②(公財)文化財保護・芸術研究助成財団
※通信欄に「熊本地震」とお書きください。

◎賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い
(賛助会員)

当財団では、財団の活動趣旨にご理解、ご賛同いただき、恒常的にご支援いただける法人、個人の賛助会員を募集しています。入会申込書をお送りします。

法人正会員 年額(1口) 50万円

個人正会員 年額(1口) 1万円

維持会員 年額(1口) 10万円

〈ご寄付〉

賛助会員の他に、ご寄付も随時受付けております。ご寄付の方法はいろいろありますので、左記のとおりご紹介します。詳細は当財団事務局又は左記の問い合わせ先まで。

(1) 銀行振込又は郵便振替

銀行振込や郵便振替でもご寄付を受付けております。

(銀行振込)

○三井住友銀行 上野支店

普通 6615500

○みずほ銀行 上野支店

普通 4478576

○三菱UFJ銀行 上野中央支店

普通 0796384

(郵便局から振込み)

○郵便振替

00160・5・12319

※口座名義は、銀行、郵便局、いずれも

(公財)文化財保護・芸術研究助成財団

(2) YAHOO! JAPAN ネット募金

クレジットカード又はTポイントにより

寄付するものです。

ネットからYAHOO! JAPAN ネット募金を選択、「文化・スポーツ」を選択、「文化財保存修復募金」からご寄付できます。

(3) 特定寄付信託

信託した金銭を運用収益とともに寄付するものです。当財団はみずほ信託銀行と特定寄付信託に関して契約しています。
問合せ みずほ信託銀行(03・3274・9203)

(4) 遺贈

遺言によるご寄付も受付けております。

(5) 商品券・図書券等による寄付

ご家庭のタンスや事務室の机等の中で眠っている、未使用の商品券、図書券、切手、収入印紙、ビール券、お米券、旅行券、QUOカード、テレホンカード、書き損じ葉書等もご寄付として受け入れております。お送りいただく場合は、当財団事務局宛てに封書にてご郵送下さい。

●税法上の優遇措置

当財団は「公益財団法人」としての認定を受けておりますので、賛助会費・寄付金(募金)には税法上の優遇措置が適用され、所得税、法人税等の控除が受けられます。詳しくは当財団ホームページでご確認いただくか事務局までお問い合わせください。

☆財団案内及び賛助会員入会申込書のご請求、その他ご質問等お問い合わせは財団事務局までご連絡をお願いいたします。

お知らせ

(1) 平成三十一年度助成金の申請に関するお知らせ

平成三十一年度助成事業にかかる助成金申請について、左記のとおり受付けを行っております。詳細は、当財団ホームページ(助成金のご案内欄)でご確認ください。

① 例年実施の文化財保護、芸術研究に係る助成事業

② 熊本地震被災文化財復旧支援事業(申請期間)

平成三十一年一月十日～二月末日(必着)

(2) 文化財保存修復支援カレンダープレゼントのお知らせ

当財団広報誌(秋号No.88)でプレゼントのお知らせをしました2019年版の文化財保存修復支援カレンダーについて、十二月十一日に応募者全員に発送しました。

受章・受賞

当財団は、阪神大震災、東日本大震災、熊本地震などの大規模災害時に国内の文化財

今号の表紙

平山郁夫 磯の朝



文化庁創立50周年記念表彰



磯の朝 1973年

ここに描かれている風景は、鎌倉に近い三浦半島の海であろうか。波静かな磯。瀬戸内海で生まれ、育った画伯にとってこの海は故郷を彷彿させる力をもっていたことだろう。

水平線から昇った旭日には当時の画伯

編集後記

の想いが込められている。平山郁夫画伯、四十三歳。以後、画伯は「シルクロード」と「仏伝」を二大テーマとして数々の傑作、大作を世に送り出してゆく。

本年四月をもって「平成」という時代が終わります。次の元号は、この時点ではわかりません。当財団は、平成の誕生とほぼ軌を一にして誕生しました。その意味では、大変感慨深いものを覚えます。

新しい時代がどのようなものになるのか、こちらも誰もわかりません。しかし、誰もが願うことが、平和で豊かな世であることは、確かです。

時が移り、人が変わっても、私たちの活動は基本的に変わることはありません。ただ、ここ数年の傾向として、寄付金は減少しております。皆様方の浄財によって財団運営は成り立っております。私たちも、事情を理解し、さらに経費節約に努めます。皆様方におかれましては、これを御理解のうえ、一層のご支援、御協力賜りますようお願い申し上げます。

広報誌「絲綢之路」(シルクロード)

二〇一九年 新春号 通巻第八十九号

★平成三十一年一月二十五日発行

★編集発行/公益財団法人文化財保護・

芸術研究助成財団 事務局◎

〒110東京都台東区上野公園十二一五十

電話(〇三)五六八五一一三一一

FAX(〇三)五六八五一一五二二五

URL:http://www.bunkazai.or.jp/

E-mail:jimukyoku@bunkazai.or.jp

★印刷 株式会社東都工芸印刷